
千雨の夢

メル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千雨の夢

【コード】

N0988BA

【作者名】

メル

【あらすじ】

果たして夢を見ているのか、今までの夢だったのか・・・
千雨魔改造ものです

夢の始まり

「長谷川さん。 長谷川さん！」

この良く出来た夢は、一見なんてことはない、良く晴れた春の教室の一室から唐突に始まった。

「・・・んあ？」

名前を呼ばれて顔を上げれば、教壇の上から女の先生が教科書と教鞭を持ってこちらを見つめていた。

ジャージ姿で教鞭を持つその姿を見て、小学校かよ、と思わなくもないが、変人揃いのこの麻帆良だ。十分許容範囲どころか、ど真ん中ストライクだろう。

それに実に動きやすそうだ。おそらくもう少し反応が遅れれば私の机の元へ向かってきただろうことは容易に想像できた。

「長谷川さん！ 先生がいま何て言ったか聞いていましたか？」

いけない、ボーっとしすぎたか。周りを見なくてもクラスメイトの視線が突き刺さっているのが感じられた。やばい、赤面ものだ。

いや、この程度このクラスじゃどうってことないのはわかってるけど、私には私のアイデンティティってのがある。

急いで何か返答しないと、えーっと、そもそも今は何の授業だったか・・・？

机の上の教科書が開いているページは、つと・・・

「もう、やっぱり聞いてなかったのね。もう一度聞きます、”なのだん”は覚えてきましたか？」

「・・・は？」

開けっ放しの窓から入ってきた風が、机の上の教科書を数ページ戻らせる。

そこには ” はじめての九九 ” と書いてあった。

「・・・は？」

それは、一見とても甘く優しい夢。そう、夢を見ているのか、夢から覚めてるのかも分からなくなるくらい、甘い甘い蜜のような夢だった・・・。

千雨の夢 はじまります。

ってモノローグっぽいこと言ってる場合じゃねえ！ 七の段!？

七の段って九九のあれだよな!？

なんだ、とうとう小学2年生からやり直しになったのか!？ 1年生からじゃかわいそうだから1年オマケしてやるよってか!？ うれしくねーよ!!

バカレンジャーだけつつこんどけばいいじゃねーか!

いや、それよりとりあえず七の段だ、落ち着け、確かに七の段は九九の中では鬼門だ、私的には最大の難関だった。つつーか語呂合わせ的なあれで答えりゃいいのか?

しちいちがしちしちにじゅうし、って言っていけばいいのか!？

「長谷川さん、ほら、しちいちが・・・」

しってるわボケー！！ わざわざ隣から教えなくてもいいって！
誰だ、綾瀬か！？

「高町さん、教えちゃダメですよ？ ちゃんと自分で覚えないと意味が無いんです。」

高町さん！？ 高町ってだれだよ！？ てか良く見たらガキしかいねー！？ さすがに龍宮は無理があったか！？ 鳴滝姉妹がその辺にまざってねーか！？

ってか私だって無理があるわ！！

いや、待て、七の段だ、落ち着け、とりあえず七の段だ。こういうときはあれだ、まず慌てず騒がず七の段で立ち上がって、しれっと七の段を答えて座っちまえばいいんだ。

よし、まず椅子を引いて、立ち上がって、七のって何だこの視界？
妙に低くねーか？

まるで身長が30センチくらい縮まったみてーな、って・・・

身長が 本当に 縮んでやがる

やばい どーなってるんだ これ？

「は、長谷川さん！？」

私は、意識を手放した。

「うわあああああああ！？」

掛け布団を蹴り飛ばし、勢い良く起き上がる。心拍数は最高記録を絶賛更新中で、息は喉が裂けるのではと思うくらい荒く、全身汗でびっしょりと濡れて。

1分か、2分だろうか、兎に角起きたまま固まっていたが、すこし落ち着いたところで辺りを見回す。

まず目に入るのはいつも寝ている自室のベット。次にコスプレ衣装が入っているクローゼット。そしてデスクの上に置いてあるパソコン、カメラ、部屋の隅に固められた撮影機材。

そこは既に1年以上を過ごした寮の一室だった。

「良かった・・・！ 夢落ちでホントに良かったあ・・・！！！」

やっぱりあれか、最近流れてる学年最下位だと小学生からやり直して噂、あれのせいか！

いくら麻帆良でもそこまでしねーだろ、とは思っていたけど、心のどっかではあれを信じてたのか。で、夢に出たと。

くそ、ここにいるかぎり安眠もできねーのかよ・・・！！

「ちっ・・・はあ。・・・シャワーあびよ」

・・・まあ、それもいまさらか。登校の準備しねーとな。
今日も最低の一日になりそうだ。

「あー、ねみい……。」

昼休み。ふつーに一人で飯を食って、休み時間はまだあと30分くらいある。

睡眠時間はいつもと同じくらいだけど、あの夢のせいか眠くて眠くて仕方ない。

「おや、いつにも増して眠そうですね、長谷川さん。」

「ん……綾瀬か。」

伸びをしたり目の周りを揉んだり、なんとか眠気を撃退しようとして格闘してたところ、隣の席の綾瀬が話しかけてきた。

こいつは2Aの中でもまだ話せるほうだ。とは言っても比較的、という程度でしかないが。

「今日は夢見が最悪でな、ぜんぜん寝れた気がしねーんだ。」

まあでも友人の範囲に片足の先が入り込む程度には喋る仲でもある。ほかの連中が濃すぎるだけに、綾瀬も一歩引いた位置によくいるためだ。

「午後一番は新田先生の授業です。ある意味眠気が覚めるかもですが、何なら授業前に起こすので一眠りしてはどうですか?」

新田か……。新田の前で眠そうにしてたら朗読や感想なんかをわ

わざわざ当てて来そうだな。
ここは綾瀬にあまえるか。

「あー、悪い。それなら寝させてもらうかな。」
「ええ、眠気覚ましの飲料も用意しておくですよ。」
「いや、それは・・・いい・・・」

こいつの飲み物は・・・変なの・・・ばっかりだから・・・な・・・

「おや。本当にすぐ寝たです。そんなに夢見が悪かったですか。」
「ゆえー。炭酸コーヒーのトマト味しかなかったよー？」
「いえ、あるいみお誂え向きです。どうですか、のどかも？」
「わ、わたしはオレンジジュースでいいやー。」

「・・・ん？ 布団？」

・・・あれ、なんで私横になって寝てんだ？ 机で寝てたような。
それにここは・・・保健室？

「あー、長谷川さん！ 起きたの？ 大丈夫？」
「ん・・・えつと、高町さん？」

またこの夢か！

明晰夢？

つまりこれはあれか？ 明晰夢ってやつか？

夢の中で夢だと自覚できてるんだし。あれって行動も好きに出来る場合もあるらしいが・・・

「もー！ 急に倒れるから心配したんだよ!？」

「いや、ごめんね高町さん。」

どうやら今回は見てるだけらしい。こうなると普通の夢と何も変わらないよな。

起きた時に無駄にドキドキしたりビクリすることが無いくらいか。恐らくこれはさっきの夢の続きで、倒れた私は保健室で寝かされたんだろう。

で、隣の席の高町って子がこうして着いてくれてるってところか。付き添ってきたのか、授業が終わってから様子を見に着たのか、かな。

9

「高町さんはどうしてここにいるの?」

お、私ナイス。まさしく聞きたいことを。

「えっと、長谷川さん起きた時に一人じゃ寂しいかなっておもって

」

てへっなんて感じで首を傾げながら笑いかけてきやがった・・・！ガキだけど、優しくていい子なんだろうな。そして天然だ、間違いない。

「そ、そう……。でも、いいよ。私に付きまとわないで。」

優しくいい子なら、2Aのやつらも大概そうだ。けど、あいつらと私じゃ絶対に合わない。

友達以上の付き合いなんてできっこない。だから、きつこの子も・

バンツ！！

「ちよつと長谷川！！　せつくなのはが心配してるのに、なによその言い方！！！」

と、突然大きな音を立てて保健室の扉を開き、金髪の少女が怒鳴り込んできた。

いいんちよタイプか、基本は抑えてるんだなこの夢は。

高町、なのは？　が、保健委員か？　だとすると次に出るのは風紀委員か。

「アリサちゃん、怒鳴っちゃだめだよ！」

あー、図書委員か。はずした。

「でもだつてすずか、なのはが昼休みずっとここにいるのに、あの言い方は無いじゃない!？」

「にははは、私は別に気にしてないんだけど……。でも、同じクラス友達だもん、ちよつとくらい一緒にいてもいいよね？」

「友達なんて、いらない。」

このアリサって子が言ってるのはまったくの正論だ。あーあ、夢の中でまで私の環境は変わらないのか。

どれだけ仲良く友達付き合いしようとしたって、所詮私が私に嘘をついて、上辺だけの綱渡りのような友情しか生めやしない。それならいつそ友達なんていらぬさ。その方が楽だ。

「友達が要らない？ 何でそう思うの？」

図書委員が・・・じゃない、すずかだったか、が理由を聞いてきた。その後ろではアリサが高町に取り押さえられている。ますますいいんちよだな、アリサ。

「だって、みんな私のこと嘘つきって言うから。」

それについてはもう諦めた。人が車より早く走ろうが、1000mを超える木が普通にはえてようが、ロボットが歩き回ってようが。だれも気に留めないどころか、当然だと思ってやがる。

そんな中一人で騒ぐのには、もう、疲れた。

あーあ、夢の中で、ガキ相手に何いつてるんだろうな、私。

「あんたの何が嘘つきだっというのよ！ ためしに何か言ってみなさいよ！」

ためしに、ねえ・・・。じゃあー

「1000mを超える木が観光名所になってない」

「えっ？ えっと、世界中から観光客が来ると思うけど・・・」

ん・・・？

「恐竜ロボットが走り回ってた」

「はあ？ 立ち止まって手と首と顔を動かすくらいがせいぜいでし

よ？」

あ、あれ・・・？

「車より早く走る人がいたんだけど・・・」

「にははは、さ、さすがにそれは嘘って言われると思つなあ・・・」

あ、そうか、これは夢だから・・・

「あんた、わざと変なこと言つて私たちを巻こうとしてない？」

「・・・うん、変なこと、だよ」

「ちよ、ちよっと長谷川さん！？　なんで泣いてるの！？」

ここは麻帆良じゃないんだ・・・。ひよつとして、これは私が望んだこと、なのか。

「高町さん。」

「え、な、なに！？」

「ごめんね、失礼なこといって。」

「・・・！　ううん、あ、名前で呼んでくれたら許してあげる！」

「まったく、いつものが始まったわ」「なのはちゃんらしいね」

「・・・なのは？」

「うん！　千雨ちゃん！」

この夢の中でなら、私は自由に友達を作れるのかもしれない。
所詮夢だけど、そんな気がした。

キーンコーンカーンコーン・・・

「あ、お昼休み終わっちゃーうー！」

「長谷川、あんたはお母さんが迎えに来るらしいからまだ寝てなさい！」

「じゃあまた明日ね、千雨ちゃん！」

私は涙を流しながら、手を振って3人を見送った。

その後、母親が迎えに来て、一緒に手をつないで家へと帰った。

「倒れたらしいけどずいぶん嬉しそうね、千雨？」

「うん、友達ができたの！」

「そっか、良かったわね。」

夢の中の母親とこんな会話を交わしつつ。

「つか、そろそろ醒めるべきじゃね？」

夢Ⅱ理想？

「長谷川さん。長谷川さん！」

「・・・んあ？」

結局。あの夢は家に帰って食事して、風呂に入って歯磨いて自分の部屋でゲームして、ベットに入って暫くたって終了した。恐らく寝たんだろう。

やはり夢だからかダイジェスト風に流れていくので時間の経過は大して気にならなかったけど、ほとんど1日の経過を夢に見るのも珍しいもんだ。

いや、授業の途中からだから3/4くらいか。どうでもいいな。

で、夢が終わったと同時に綾瀬に起こされた、と。ずいぶん切りがいい夢だ。

「はい、約束どおり眠気覚ましの飲料です。どうぞ。」

「た、炭酸コーヒートマト味・・・だと・・・っ!？」

顔を上げて隣を見ると、そこには綾瀬と宮崎がいた。それはいい、こいつらと早乙女はセットみたいなもんだ。

それに綾瀬に授業前に起こしてもらおうよう頼んでたしな、何の疑問もない。

炭酸コーヒー？ まだアリだ。馬鹿なもん作ってんじゃねーよってメーカーに文句いって、乗せられて買ってんじゃねーよって購入者に文句いった後なら、一口ぐらい飲んだっていい。いや、味次第では2-3口飲んでもいいさ。
だがトマト、テメーはダメだ。

「おや、まさか飲めない？ これはわざわざのどかが校外の自販機

へ行って買ってきてくれたものなのですが。」

「ゆ、ゆえー。あれはついでだったただけだから・・・」

くっ、なんだ、私が悪い流れなのか？ でもこのチョイスは無いだ
る！？

ああ、くそっ！ こうなりやヤケだ！

「わかったよ、飲めばいいんだろ！ よこせ！」

綾瀬から缶を引ったくり、キャップ式の口を回し開け、口元へと運
ぶ。

そして一口目を口に流し込んだ時、まず最初に広がるのは炭酸の刺
激。

それとともにコーヒートの風味が口いっぱいに広がって、

（あ、案外ありかも？）

と不覚にも一瞬思っちまった。

しかしいざ飲み込もうとしたとたん襲ってきた、猛烈なトマト。

そしてそれがコーヒートと混ざり合い、臭覚を乗っ取ってしまう。

さらに炭酸に乗り刺激となって口の中を蹂躪し、若干温いから爽やか
かさの欠片もないわけで・・・

「・・・不味い」

一口飲んだだけでギブアップだ。これは飲めたもんじゃない。

「ふふふ、この味が分からないとはまだまだですね、長谷川さん。」

ふと綾瀬の机を見ると、そこには空になった炭酸コーヒートマト味
ほんと、こいつは飲み物に関しては何を抜く変人だ。味覚全般かも
しれねーけど。

その証拠に、

「飲むか？ 宮崎。」

「（ふるふるふる）」

ほら、宮崎だって若干青ざめながら首を振ってやがる。

「むう……二人ともまだまだです。」

キンコーンカーンコーン……

「あ、それじゃ私はもどるねー。」

授業開始のチャイムがなる。新田は珍しく少し遅れるようだ。

いつもならチャイムと同時に教室へ入ってきて、まだ立ち歩いている生徒をみて小言を大声で言うくらいはするんだけどな。

あと認めたくないが、炭酸コーヒートマトのおかげで眠気は完全に吹き飛ばしてしまった。

「そうそう、長谷川さん。夢見はどうでしたか？」

「あー、これのせいで台無しだ。」

そう言い、まだ手の中にあるコーヒをすこし掲げてみせる。

「ふふ、つまり夢自体は良かったですか。」

「ん？ ああ……」

夢自体は、か。まあ、たしかに……

「悪くは、無かったぜ。」

結局、あのは（2A基準では）とくに何事もなく、6時間目の授業も終わり私はまっすぐ寮の自室に帰ってきた。なんとなく捨てずに持ってきてしまった炭酸コーヒートマトを見つめながら、パソコンをつけて今日あったことをつらつらと考える。

（友達、か・・・）

あの夢はきつと私の理想の小学校時代、なんだろう。100mを超える木が日本にあるのは変だし、ロボット技術は人型ロボットが駆け足する程度で大ニュースだ。車より早く走れる人がいっぱいいて、学生なんてしているわけがない。けどここではそれが当たり前。変なのは、いつだって私だった。

（そこまで精神的に弱くはない、と思ってたんだけどな）

今日の綾瀬との会話みたいに、何の気概もなくバカなことをいつでも言い合える・・・

そんな友達がほしかった、んだろうか。

あの夢は2回連続を見た。しかも夢にありがちな、2〜3分も経てば忘れるような夢じゃなく。

まるで実際に経験したかのように鮮明に覚えている。

じゃあ、ひょっとして。

もう一度寝たら、あの夢の続きが、見れるんじゃない……

「……はあ、バカらしい。」

そんなわけではない、単なる偶然だ。きつともう一度寝たら、全然関係ない夢を見るか、夢なんて見ずに時間が過ぎれば起きるんだろう。そう、馬鹿馬鹿しいことを考えてないで、趣味のコスプレか掲示板への返信でもしねーと。

(ナイーブ、ってやつか？ それともセンチメンタル？)

気分転換でもするか。とりあえずこのコーヒーは冷蔵庫にでも仕舞っておこう。冷やせば少しは飲めるもんになるだろ。

そう思い、パソコンで自分のホームページを開きつつ、コーヒーを冷蔵庫へ持っていく。

中にはペットボトルに入った水しか入っていない、自炊してなければこんなもんだ。

コーヒーを仕舞ったあと、ホームページの掲示板を見るが、こんなときに限って新しい投稿は無い。

コーヒーについて書き連ねておけばそのうち誰か返信してくるだろう、とは思うが……

(……ちよつとだけ、寝るか？)

馬鹿馬鹿しい、そう思いながら。

いや、夢を見たいんじゃない、ちよつと食事時まで軽く寝たいだけだ。

今朝はよく寝れなかったし……

と、だれに宛てるでもない言い訳を考えつつ、ベットの中へと入っていった。

続く夢

「千雨ー！ おきなさーい！」

・・・普通に見れたよ、続き。

あれか、前回は寝て終わったから、今回は起きたところからってことか？

それでたぶん寝ると夢から醒めるんだろ？

「千雨ー！ まだ寝てるのー！？」

「いま行くー！」

しかも今回は行動まで自由に出来る明晰夢、と。まるで胡蝶の夢だな。

つと、とりあえずパジャマから着替えるか。このパジャマもガキの頃着てたのと一緒だな。

別に感慨深くもなんとも無いが、すっかり覚えてる自分にちょっと苦笑してしまう。

これを着てたころはまだ自分の言うことを聞いてもらおうと一生懸命で、周りから変な目で見られてたっけ。

この夢は家そのものは実家と一緒に、ただ通ってる小学校が違う設定らしい。

海鳴市という街に住み、私立聖祥大附属小学校の2年生。

麻帆良のまの字も周りには無く、非常識の気配もどこにも無い。

あ、いや、昨日のアリサとすずかはお嬢様らしいが、まあその程度だ。

こんな設定もすらすらと思い出せるのは、夢ならではのご都合主義というやつか。

「朝ごはんさめるわよー！」
「はいー！」

おっと、こっちの母親が呼んでる、怒り出さないうちにさっさと着替えて食べるとするか。

夢の中で食事するのも妙な気分だぜ・・・。

「いつてきまーす！」

「いつてらっしやーい」

朝飯を食べたあと、いつものように、というのも変な気分だけど、まあいつものようにバス停まで歩いて向かう。

上級生か下級生か知らないが、バス停には既に数人の小学生が並んでいたが、特に挨拶することも無く列の後ろへと続く。

バスを待つ間、小学2年生ってどんな授業やってたかを思い出してみるけど、さっぱり思い出せない。

どうやら算数は九九をやっているところみたいだけど・・・まあ、どうにでもなるだろ。

伊達に中学2年生をやっているわけじゃない。

お、ひよっとしてこれって強くてニューゲームってやつか？

全学生の憧れだな、うん。

なんてことを考えているうちにバスが到着し、適当に空いてる場所へ座ろうとしたときに

「千雨ちゃん！ こっちこっちー！！」

バスの一番後ろ、5人掛けの席を占領してる昨日の3人組の一人、なのはが大声で呼んできた。

「恥ずかしいからそんな大声で呼ぶな！」
「にははは、ごめんごめん。」

そう文句を言いつつ3人組の元へ向かう。なのはは大きく、すずかは小さく手を振り、アリサは腕を組んで不敵な笑みを浮かべていた。こんな小さなことでもそれぞれ性格の違いが出るもんだ。そしてアリサ、お前はどこの王女様だ。

「あれ？ あんたこの時間のバスに乗ってたんだ。」

「おう、こういう後ろの席は不良の指定席だからな、目合わせないようにしてた。」

「だ、だれが不良よ！」

「クラスメイトが心配で保健室と教室を行ったり来たりするいい子だもんな。誤解してた、すまん。」

「・・・っ！」

おーおーアリサのやつ顔真っ赤。ちよつとしたジャブを打ってきたから、お返ししたただけなだけどな。

その隣ではすずかが「長谷川さんの勝ち」なんか言ってるし。そしてやっぱこいつ典型的なツンデレか。ツンデレお嬢様ってテンプレすぎじゃないか？

「まあ、これからも宜しく頼むよ『アリサ』、『すずか』」

そう言っつて二人に笑いかける。そうするとちよつと間が空いた後、

「当然じゃない、千雨」

「うん、千雨ちゃん」

「あ、ねえねえ私は！？ 千雨ちゃん！？ ねえ！？」

ああ、やっぱりいいな、こういつの。

そして昼休み。私たち4人は一緒に屋上で弁当を食べていた。授業はやはりというか当然というか、なんの問題も無く終わるように思ったんだけど

「ちよつとなによ千雨！ 因数分解が分かるってどういうこと!?!」

そう、算数があまりにも暇なため、外をみてぼーっとしていたら、また教師に当てられた。

問題自体は1桁の掛け算なのでぱつと答えたのだが、その折教師からきちんと授業を聞けと小言をもらっちゃった。そこで売り言葉に買い言葉というか、うん、たぶん浮かれていたんだろう。いつもの私なら適当に返事をして流すところなんだけど、つい……

「因数分解までなら分かるから大丈夫です。」

つて、答えてしまい、そのまま教師のだす因数分解（中1レベル）をパパッと答えちゃった。

ぬああ、現実では常識外れの連中に嫌気がさしていたはずなのに、こっちで私が羽目はずしてどうすんだ……!

しかも大丈夫って、なにが大丈夫なんだよ！ 痛い子じゃねーか……!

「千雨ちゃんって頭良かったんだね。塾とか行ってるの?」

「うがぁぁ・・・! って、ん? 塾は行ってねーよ。」

「じゃあなんで因数分解なんて知ってるのよ?」

「あー、家庭教師? みたいなもんだ。」

うん、嘘は言っていない? 微妙だな。

まさかこれは夢の中で、現実では中学2年生ですなんて言えるわけがないし。

その後もずるいとか教えろとか言ってくるアリサを適当にあしらいつつ食事を続け、そろそろ昼休みも終わろうかというところ。

「ねえ、今日放課後千雨ちゃんの家遊びに行っていない?」

と、なのはがこんなことを言い出した。

私の家に? 遊びに? 別に見られて困るものは(寮の自室と違って)何もないし、特別断る理由もない、か。

「いいけど、ゲームくらいしかないよ? 普通の家だし。」

「いいね、ゲームしたい!」

「勉強教えなさいよ!」

「私も行ってみたい!」

と満場一致で可決され、放課後私の家に案内することになった。

そして今度こそ何事もなく授業が終わり、放課後。

校門まで迎えにきたアリサの家の車で(リムジンだった)私の家ま

で案内し、部屋に上がらせた。
思えば何気に初じゃねーか？ 友達を部屋に上げるのって……。
って、いかん、これは夢だ。なに普通にカウントしようとしてるんだ私は。
それに麻帆良の連中を部屋に上げることは絶対ない！

「あー！ このカメラ最新のやつだ！？ 千雨ちゃん撮っていい！？」

と、そんなことを思っていると意外にもなのはがカメラに興味を示した。

部屋の中のものはある程度向こうと同じものがあるらしい。カメラやパソコン、あと小物だな。
撮影機材とコスプレ衣装は無いが、これはきつと私が隠したいと思っ
っているからなんだろう。

「ああ、適当に撮っていいぞ。メモリーもまだ空きがあるはずだし。」

「やったー！ ありがとう！」

それじゃ飲み物とってくるから、適当にしててくれー。

と、3人に声をかけて（聞いているかどうか知らないが）、私は飲み物を取りに台所へと移動した。

何があるかなー、麦茶でいいかなー、と思いながら冷蔵庫を開けると、そこには

「こ、これは・・・！」

「またせたなー」

「あ、お、おか、おかえり!?!」

「……ん? どした?」

コップ4つに麦茶が入ったポット、あと黒い液体が入ったコップを1個お盆に載せて、私は部屋へと戻ってきた。

てつきりカメラで適当に部屋の中を取りまわってるか、ゲームか本棚でも漁ってるかばかり思っていたが、予想は外れ3人してカメラのディスプレイを覗き込んでいた。

お互いを写真に撮って写り具合を見てるのか? とも思ったけど、それにしても慌てすぎだ。

一体何してるのかと思いきや私もカメラのディスプレイを見ようと覗き込むも

「だめ!?!」

隠されてしまった。

「おいおい、それは私のカメラだぜ? 何撮ったんだ?」

「え、えーと、千雨ちゃん怒らない?」

「言ってみな。」

「あ、あのね、撮った写真を見ようとしたら、こんな写真が出てきて……」

そう言い、ディスプレイを私の方へ向けるのは。そこに写っていたものは……

「ぬあああああ!?! 見るな!?!」

モリンのコスプレをした私（中学生ver）だった。

「ご、ごめんね！？ わざとじゃないんだよ！？」

「あははは！！ 似合ってるじゃない！ なんで隠すのよ！」

「うん、ホント可愛いよね。これって千雨ちゃんのお姉さん？」

お、おね？ そうか！ いま私は小学生だから・・・！

「そ、そう！ いや、従姉妹だ！ いやーうちに来てカメラで撮っていくんだよ！ あはは！」

ああ、くそ、恥ずかしいな！ なんでこんなのに限って一緒にくるんだよ！？

コスプレ衣装がなくて安心してたのに！ 油断もすきも無いな！

「ああくそ、アリサ！ 思いっきり笑いやがって！ お前はこれを飲め！」

「ん？ なにこれ、コーラ？」

そう言い、アリサには麦茶じゃなくて冷蔵庫に入っていた『アレ』を渡す。

ああ、コーラみたいなもんだ、そう言うとアリサは特に警戒もせず一口飲む。

そう、もちろんその正体は・・・！

「んぐ！？ ツカハ、ゴホツ、ま、不味い！？ なによこれ！？」

「ははは、炭酸コーヒートマト味だ。」

「どこから買ってきたのよこんなもん！？」

「ハハハ、写真の従姉妹が持ってきたけど不味くて飲めなかった。」

「そんなもん飲ませるんじゃないわよー！？」

「そ、そんなに不味いの？ 私も少し飲んでみたい・・・」
「や、やめておきなさい！？ なのは！？」

お、今度はアリサとなのはが漫才を始めたな。今のうちにカメラ隠すか・・・。

つと、さすがが寄ってきた？

「ねえ、千雨ちゃん、吸血鬼とか好きなの？」

「あ、あ？ いや、吸血鬼物か？ んー、結構好きだぜ？」

「ふーん、そつかあ・・・。」

一体なんだ？ ずすかのやつ、なんか変だったけど。

「あ、私も飲んでみたい！」

まずーい！ って言って麦茶を飲んでるのはから、コーヒーを受け取るずすか。

あ、案外飲めなくもないかも・・・？ なんていって二人からすごい目でみられている。

「あはは、いいよな、やつぱ。」

うん、楽しいな、やつぱり。

「ちょっと千雨！ のこりはあんたが飲みなさいよ！」

「げ！？ ずすか、頼む！！」

その後もみんなで騒ぎ、ゲームし、パソコンの中にあつた別のコスプレ写真も見つかってまた一騒ぎし、空が赤くなり始めたところで解散となった。

「お邪魔しましたー！」

「また明日ね、千雨ちゃん！」

「ばいばーい！」

「元気な子達だったわねー。昨日言っただお友達？」

「・・・、うん！」

P i P i P i P i . . . P i P i P i P i . . .

「ん・・・晩飯の時間か・・・」

その後、やはりというかなんと言うか、夜になりベットに入って、しばらくしたところで目がさめた。

部屋の中は薄暗く、廊下からはキヤーキヤーと騒ぎ声が聞こえるが、部屋の中からは物音一つせず。

部屋の扉が向こうの世界（非常識）とこっちの世界（常識）を隔てる境のようで。

いま見たものは所詮夢だ、夢ではあるんだけど・・・

「たのしかった、なあ・・・。」

そうつぶやくと、起き上がり、冷蔵庫から水を取り出し一口飲む。

そして、「何も入っていない」冷蔵庫へ水を戻し、食堂へと向かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0988ba/>

千雨の夢

2012年1月3日05時07分発行